

博 士 学 位 論 文

内 容 の 要 旨

お よ び

審 査 結 果 の 要 旨

甲 第 1 2 8 号

2 0 1 5

創 価 大 学

本号は学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規程による公表を目的として、平成27年9月12日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条1項（いわゆる課程博士）によるものである。

創価大学

氏 名	山本 美紀
学 位 の 種 類	博 士 （ 人 文 学 ）
学 位 記 番 号	甲 第 1 2 8 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 2 7 年 9 月 1 2 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 創価大学大学院学則第 3 1 条第 2 項該当 創価大学学位規則第 3 条の 3 第 1 項該当
論 文 題 目	日本文学の表現研究 ー古典文学と近代文学をつらぬく理論ー
論 文 審 査 機 関	文学研究科委員会
論 文 審 査 委 員	主査 西田 禎元 文学研究科教授 委員 山岡 政紀 文学研究科教授 委員 井上 明芳 國學院大學准教授

論文題目

日本文学の表現研究
—古典文学と近代文学をつらぬく理論—

I〕 論文内容の要旨

本論文は、日本文学の表現の諸相というテーマのもと、古典文学と近代文学をつらぬく文芸理論の視座から、藤原定家と森敦の表現理論と作品について考察した、文学における表現研究である。

27 万字を超える論考の、全体の構成は以下のとおりである。

序 古典文学と近代文学の理論 —表現研究のために—

- 1、定家の歌理論 2、森敦の文学理論 —内部・外部・境界
- 3、森敦の文学理論 —反復 4、定家と森敦の言葉

第一章 表現の諸相 —言葉の意味付け

第一節 読み換えられる意味

- 1、本歌取り 2、引用された人麻呂の歌 3、引用された芭蕉の句
- 4、引用された蕪村の句 5、「夜の靴」における詩の意味

第二節 現れる事象

- 1、和歌の「わたし」 2、物語の「わたし」 3、「わたし」の語りが現す景色

第二章 表現の諸相 —選択された言葉

第一節 「物語二百番歌合」 —大要と成立

- 1、構成 2、歌の引用元の物語との関係 3、成立 4、定家と物語と歌

第二節 「百番歌合」 —異なり、補い合う言葉

- 1、浮舟と飛鳥井の歌 2、主要ではない人物の歌 3、旅部の歌
- 4、「源氏物語」と「狭衣物語」

第三節 「後百番歌合」 —失われた言葉の再現前

- 1、「源氏物語」と「海人菰藻」 2、「源氏物語」と「海人菰藻」の歌
- 3、「物語二百番歌合」によって開かれる「海人菰藻」の物語

第三章 表現の諸相 —生成される言葉・物語

第一節 『鳥海山』 —経験の反復

第二節 「月山」と「われ逝くものごとく」 —〈対偶命題〉の実践

- 1、「一即一切」・「一切即一」と「金剛界」・「胎藏界」
- 2、「月山」と「われ逝くものごとく」の概要
- 3、「月山」と「われ逝くものごとく」の構造
- 4、「月山」と「われ逝くものごとく」と「意味の変容」

第三節 「月山」の方言 一言語空間の方言

- 1、書かれる方言
- 2、実際の方言との比較
- 3、「わたし」の語る方言

第四節 森敦自筆草稿 一痕跡として残る言葉

- 1、自筆草稿からみえる物語構想
- 2、わら半紙草稿からみえる語り方
- 3、捨てられた草稿からみえる言葉の模索
- 4、再び現れる言葉

第五節 「われ逝くものごとく」の「わたし」 一語りにより生成する人物

- 1、語りの構造と機能
- 2、三層の時間
- 3、「わたし」において発現する時間

結論と課題

付録

藤原定家略年譜

森敦略年譜

初出掲載一覧

参考文献一覧

〔内容の要旨〕

<序>においては、第一章以降の本論で取り上げる藤原定家の和歌理論と森敦の文学理論に触れ、言葉の選択・意味付け・生成といった文学作品の方法について概説している。

本論の第一章では、「言葉の意味付け」という表題のもとに、文学における引用された言葉・作品と、引用した言葉・作品との双方向的意味の読み換えについて、古典文学の<本歌取り>の例や、近代文学における古典引用の例（横光利一の『夜の靴』における人麻呂歌・芭蕉句などの引用）を示しながら、詳しく述べるとともに、語られている<わたし>と語っている<わたし>の概念に言及している。

本論の第二章では、「選択された言葉」という表題のもとに、藤原定家の『物語二百番歌合』について、詳細な検討を試みている。

特に、前半の『百番歌合』（『源氏狭衣歌合』ともいう）については、これまでの研究史の再確認をするとともに、引用された物語の歌と、番えられた歌合の歌における、両者の共

通点と相異点について、＜異なり、補い合う言葉＞や＜対立と補完＞という、新しい＜読み＞を提示している。

それは、もともとの＜物語＞に記されていた歌が、選択されて＜歌合＞の歌として番えられたときに、新たな意味付けがされ、そして更に、新たに意味付けされた歌が、もともとの＜物語＞の解釈をより拡大するということである。

本論の第三章では、「生成される言葉・物語」という表題のもとに、森敦の『月山』と『われ逝くものごとく』について、詳細な検討を試みている。

ここでは、森敦の生命ともいうべき文学理論の『意味の変容』における、＜対偶命題＞の＜内部／外部・境界＞の理論をふまえて、＜過去（語られた「わたし」の体験）＞と＜現在（語っている「わたし」の物語）＞の関係を述べ、森の理論が『月山』や『われ逝くものごとく』の作品構造に密接していると解説する。

森敦の難解ともいえる文学理論を取り上げた申請者の論述も難解であるが、このような解析は従来の研究には見られなかった新しい視点であると思われる。

＜結論と課題＞においては、本論文のテーマである＜日本文学の表現についての研究＞について、あらためて＜言葉の選択・意味付け・物語の生成＞という方法について強調するとともに、将来にむけての課題として、『物語二百番歌合』についての詳論、森敦の文学理論をふまえた作品読解等を意図している。

〔公開発表会〕においては、幾つかの質疑が行われたが、その中で、副題に掲げられている「つらぬく理論」の解明は重要である。

これについては、必ずしも十分にまとめられた論述ではないが、＜序＞においては、言葉の選択や意味付けから生成される次なる言葉や物語の表現という、古典文学（藤原定家）と近代文学（森敦）に共通点・類似点が見られるということ、また定家には『毎月抄』などのすぐれた歌論書があり、森敦の文学理論と実作というありようにつながっていると捉えている。

Ⅱ〕 審査結果の要旨

審査委員は、本論文を精読し、公開発表会を経て、以下のように評価した。

本論文は、研究の対象と方法が斬新であり、特に今後の森敦研究に新たな道筋をつけたという点が、最大に評価される。また、作品背景の実地踏査や遺族との対面調査などをふまえた実証性も評価に値する。

やや不明瞭な論述や参考文献一覧の不備など少々問題点もあるが、総じてすぐれたユニークな論考として評価し、三審査委員ともに、博士学位授与にふさわしい論文と判断し、論文審査＜合格＞と判定した。

Ⅲ〕 最終試験の結果の要旨

申請者は平成 19 年 3 月に本学文学部日本語日本文学科を卒業、同年 4 月本学大学院文学研究科人文学専攻（日本文学日本語学専修）博士前期課程に進学、平成 24 年 3 月博士後期課程単位取得満期退学をした後、平成 24 年 4 月から國學院大學大学院文学研究科の聴講生として現在に至っている。

また、本学大学院在籍期間における TA 勤務の後、平成 24 年 4 月から学校法人白鵬女子学院白鵬女子高等学校国語科非常勤講師を勤め、平成 26 年 3 月に退職、平成 27 年 4 月から学校法人関東国際学園関東国際高等学校国語科非常勤講師を勤め、現在に至っている。

研究活動の面では、創価大学日本語日文学会・國學院大學國文學會をはじめ、解釈学会・全国大学国語国文学会・中古文学会などの全国規模の学会に所属し、学術論文が掲載されるとともに、中国での国際シンポジウム等において研究発表を行っている。

教育・研究両面での経験を経て執筆された本論文は、最終試験においても論文内容の確認と若干の助言が、審査委員によって行われ、結論として三審査委員ともに、「博士学位論文（人文学）」授与に値すると認め、最終試験＜合格＞と判定した。